Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences) 2009, Vol. 56, 95 − 104.

性差の観点からみたアサーション研究の概観

安　藤　有　美[1)]

はじめに

誰もが自分の考えや気持ちを躊躇なく表明できるとは限らない。現代社会に生きる我々は，自分の意見は取るに足らないものと感じていたり，気持ちの表明自体を軽視しているように思われる。アサーション（自己表明・自己主張）を必要とする場は様々な関係性の中で生じており，学校においては教師と生徒との師弟関係，同輩との友人関係，また職場においては上司と部下との上下関係，同僚との仲間関係，さらに家庭においては夫と妻との夫婦関係，親と子供との親子関係のように，多様な社会的文脈と関係性に囲まれながら，その場に合せたアサーションを選択，活用しながら互いのつながりを保っている。

しかし，誰もが問題を感じることなくアサーションを行えているわけではない。「素直に自分の気持ちを言うことを抑え，教師の役割上，生徒を叱ったり怒鳴ったりしてしまう」(33歳，教師，男性)，「本当は相手にしてほしいことでも，頼めず自分で全部背負いこむ」(55歳，講師，女子)（平木，1993)。このように，問題意識を持ちながらも解決策が見つからず，依然と馴染みある表現方法を用い続けることで，結果的に相手を無碍に傷つけたり，自分を犠牲にしているのではないだろうか。

我が国においても，アサーションに問題を抱える人を対象にしたトレーニングが行われている（内藤，1987；平木，1993；中釜，2000；小林，2003；清水ら，2003)。トレーニングでは特に，相手への敬意をはらいながら，必要な時に自分の意見をはっきりと表明するアサーションの獲得を目指している。こうした活動は，学校現場や学生相談機関，女性センターや企業研修などで実践され，世間での認知度は高まりつつある。活動の多くは男性と女性を分けることなく，男女が共にロールプレイ課題に取り組むものが主流であるが，一方で異性を除外し，同性グループでの実践活動もなされている（Kirchner, Kennedy & Draguns, 1979)。

同性グループでの実践利点として，異性が混じることで，無意識のうちに期待される性役割行動を演じてしまうという問題を回避することができるだろう。また，根本的に葛藤を感じる場面が男女で異なっており，参加者の課題に対するモチベーションの安定が保たれるという点があげられるだろう。

しかし現状は，性別による区別はなく，トレーニングの効果が十分に発揮されていないのではないか。その理由として，アサーションという概念が誕生した時代背景からも説明できる。1960年代，被差別者を中心に，基本的な人権の保護，および人権の平等という信念を掲げた公民権運動が活発になった。また，伝統的に従順な理想の女性像を打ち破り，真の女性のあり方を追求するウーマンリブの到来による時代の変革が，男性だけでなく女性の心も高揚させた。女性はそれまでの受け身的で被保護的立場から，自らの意見の発信を目指す存在となり，男性はそれまでの独占的で支配的立場から，女性を含めた他者容認を目指す存在となった。これは互いにそれまで慣れ親しんだコミュニケーションのあり方がそもそも違っていると同時に，目指す方向性も同じでないことを示している。つまり出発地点も目標地点も性別によって異なっていることがわかる。したがって，男女が混在した参加者グループに対し，同じ介入を行ったところで，一方には効果的な介入であっても一方には全く効果を示さないという事態が起こっているのではないか。

これまでにも，多くの研究論文で性別によるアサーション行動の違いについて言及されているものの，性別に焦点を絞った研究は少なく，またジェンダーと直接に結びつけた実証研究も皆無に等しい（園田，2003)。そこで，本論文では，性差の観点からみたアサーション行動に関する研究知見を概観し，整理することを目的とする。そして，アサーション行動の方略的概念とその定義について紹介し，関連する要因について論じる。最後に，実践活動において今後必要となる視点についての提案を行うこととする。

1）名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究生

アサーションの概念

我が国ではこれまで，アサーションとは社会的スキルの枠組みで捉えられることが多く，自分の意見をいかに主張できるかといった主張性や主張的行動が重視されていたように思われる。しかし，アサーションとは，自己の主張に加え，他者の主張にも配慮する姿勢が強調されており，今や社会的スキルとしてだけの立場でなく，アサーション独自の定義を備えた研究領域として確立されつつある。しかし，定義のされ方は研究者により様々で，世間一般の人々においても，研究者間においてもアサーションの概念的定義は一致していない（Wilson & Gallois, 1993）。ただし，アサーションの方略的概念は誕生から現在までほぼ一貫した考えが保たれている。方略的概念とは，個人が様々な場面に直面した際に用いる行動形態のことで，つまりアサーションの表現方法である。

Alberti & Emmons（1970）は，人間の行動形態について大きく分けてアサーティブ行動，アグレッシブ行動，ノンアサーティブ行動の3つの行動を提唱している。アサーティブ行動とは，自分が自分のために行動し，感情を無理なく正直に表現するものである。アグレッシブ行動とは，他者に代わって強引に選択したり，他者を犠牲にすることによって自分の目的を達成しようとするものである。ノンアサーティブ行動とは，自分の感情を抑制し，他者の選択を優先させる行動である。この考えを受けたDeluty（1979）では，アサーティブ行動（AS）とアンアサーティブ行動を大別し，アンアサーティブ行動にはアグレッシブ行動（AG）とサブミッシブ行動（SB）が含意されるとし，3つの行動を並立的概念ではなく，階層的概念として位置づけている。ただし，Delutyによるサブミッシブ行動とAlberti & Emmonsによるノンアサーティブ行動は，自己表現が苦手で，他者に対して要求したり，他者の要望に対する拒否や意義を唱えることができない行動を示すものであり，内容的には極めて類似した行動を示している。

また，Phelps & Austin（1975）ではアサーティブ行動，ノンアサーティブ行動という2つの行動形態に加え，攻撃性を覆い隠そうとする女性の特性を考慮した直接的・間接的なアグレッシブ行動をそれぞれ1つの行動形態として捉えている。間接的なアグレッシブ行動については，国内外の論文や著書でも言及されているものの，行動形態は大きな枠組みによって3つに分類されている。これは行動形態の名称が異なっていても内容的に類似した行動を示しており，Alberti & Emmonsの言うところのアサーティブ行動，アグレッシブ行動，ノンアサーティブ行動に相当するものと考えられる。Table 1では，これら3つの行動について，行動パターン，言語パターン，口調・非言語的行動，結果という観点より比較したものである。

言語論的側面

アサーション概念が，ウーマンリブの後押しを受け発展したという時代背景もあるように，当時の女性には，感じたままの発言や，自由にふるまうなどの権利は確立されていなかった。こうした問題を背景に，アサーション行動について，ジェンダーの観点から論じるものとする。

ジェンダーとは，我々が生きていく上で直面する，他者との相違点として最も重要な領域の一つである（Townwnd, 2007）。男性と女性は，生まれながらに身体的，生物学的，神経学的な違いがあり，また，その行動は育ってきた文化や，期待される性役割により起因されている。したがって，特に女性においては，アサーティブに行動することは極めて困難であると論じられており（Alberti & Emmons, 1970），また，Jakubowski-Spector（1973）でも，女性はアサーティブな行動も攻撃的な行動も，共に女性らしくない行動と捉え，女性自身で非主張的な行動を常用していると指摘している。

女性のアサーティブ行動が制限される理由として，地位特性理論（status characteristics theory）が考えられる。Spender（1980）によると，伝統的に，男性は女性よりも地位と権力を有している点で優位な立場にあり，一般的な発言や決定の操作が可能であった。これに対し，女性の発言は価値が低く，尊敬に値しないものと評価され，女性は寡黙であることが美徳であったと論じている。また，発達的観点からも，幼少期から女性の意見表明は男性に比べ高評価を受けることがなかったために，女性は発言の機会を失うと同時に，男性はさらに発言力を増していくとも論じられている（Kramarae, 1981）。

こうした考えからは，地位と権力をもつ男性の話は価値があり，幼少期から発言を求められる機会が多い一方，地位と権力を持たない女性の話は価値がなく，寡黙であることが望ましいとされていたために，女性のアサーティブ行動は禁忌されていたと考えられる。ただし，こうした傾向は半世紀前だけの現象ではなく，現在もなお根深く残っているようにも思われる。これについては，Phelps & Austin（1975）が，働く女性にまつわるステレオタイプ的な5つの考え（「女性は感情的である」「女性は不安定である」「女性は馬車馬である」「女性はプロになれない」「何でもかんでも頑張ろうとするスーパーウーマン」）を挙げ，女性がアサーティブな態度で働くこと

Table 1. 3スタイルの比較（Gambrill, E., 1995をもとに作成）

	Submissive	Aggressive	Assertive
行動パターン	・自分の好みや気持ちを表明しない	・突発的な形で、自分の予想や感情を酷評的に表現する	・明確に、率直に、自分の好みや気持ちを表明する
	・間接的で弁明的な表現を用いる	・非難したり、批判的な評価をする	・批判的な評価をするより、十分に説明をする
	・間違った人に対しては愚痴を言う	・他者に対して否定的な態度をとる	
		・威圧的、強制的な行動	・人の話をよく聞く
	・問題は回避する	・すばやく問題に対処する	
	・諦めが早く、忍耐がない	・人の話を聞かない	・忍耐強い
	・曖昧な賛同をする		
		・交渉や妥協は拒否する	・交渉や妥協を歓迎する
言語パターン	・少ない言葉数	・誘導的な言い方	・曖昧で批判的な言い方をしない
	・消極的で弁明的な言い方		・簡潔で明瞭な表現
		・“あなたは…”表現を用いた批判的な言い方	・“私は…”表現を用いた個人的な意見としての言い方
		・“いつも…”“絶対…”表現を用いた言い方	
		・頼みとしての依頼というより、強制的な要求をする	・強制的な要求というより、頼みとしての依頼
	・具体的な言い回しでなく、一般的な言い回し		・具体的な説明をする
	・具体的な表現を用いず、漠然とした表現		・協調につながるような言い方
	・質問に見せかけた表現	・質問に見せかけた非難	・質問に見せかけない表現
口調・非言語的行動	・嘆願するような、ためらい、口ごもった口調	・皮肉や批評的な口調	・十分に聞き取れる口調
	・相手の様子をうかがうような口調	・人の話の邪魔をする	
		・アイコンタクトをしない	・アイコンタクトをする
	・前かがみのうなだれた姿勢	・堅い態度	・まっすぐな姿勢でリラックスしている
	・話している内容と非言語的行動の不一致		・話している内容と非言語的行動が一致している
結果	・行使されるべき権利を放棄している	・他者の権利を侵害している	・他者の権利と同様に、自分の権利を尊重している
	・目標が達成できそうにない	・他者を犠牲にして自分の目標を達成する	・他者を傷つけることなく、強く望む目標を達成する

の困難さを示している。そして，現在ではこれらのステレオタイプが全て払拭されたとは断言できない。

女性のアサーティブ行動が制限されるもう一つの理由には，幼少期から多くの時間を過ごす同性との関係性のあり方に，男女による違いが存在すると考えられる。同性との関係性のあり方として，Tannen（1990）では，男性の会話では自分の優位を獲得，または維持し，劣敗を避けるための“競合”の場であり，女性の会話は互いを認め合い，支持し合い，合意を生み出そうとする“和合”の場として機能していると論じている。また，Caldwell & Peplau（1982）では，男性は活動を共にできる対人関係を欲し，女性は感情や秘密を共有できる対人関係を欲するとあるように，性別により特徴的な関係性のあり方がみられる。

さらに踏み込んだ考えとして，Malts & Borker（1982）は，男性は集団のリーダーになることが求められており，状況に応じて自己の考えをはっきりと主張する表現方法が重視されている。その一方で，女性は調和のとれた人

間関係を形成し，維持することが求められ，そのための表現方法が重視されていると指摘している。

以上より，地位を重視し，階層的な序列の中に身を置く男性のあり方と，他者との親密な結びつきや，共同体としての意識を重んじる女性のあり方では，求める関係性が異なるために，アサーションの表現方法も当然異なってくるだろう。特に，精神的な結び付きを求める女性にとって，自己の発言が相手にアグレッシブと受け取られる危険を避けることは重要な課題である。これにより，女性は他者との望ましい関係性を形成，維持していくためにも，多くの場面でアサーティブな行動は，有効な表現方法として機能せず，必然的に女性のアサーティブ行動は少なくなると考えられる。

では，異性とのコミュニケーションの場ではどのような問題が生じているのだろうか。

Tannen（1990）によると，異性との諍いの原因は，コミュニケーション機能に対する認識の違いにあるとしている。例えば，男性がストレスを抱えた場合，時に他者との関わりを回避することがある。普段とは違う男性の態度を気にした恋人は，話し合いを持ちかけるが，男性はそれを疎ましく感じ，聞き流そうとする。それに対し，女性はいち早く情緒的なつながりや安心感を確認したいため，より一層に話し合いを迫る。こうした異性間のすれ違いの原因として，男性は独立性や地位といった考えを重視し，課題に対しての模範的な回答であったり，課題を受け流すためにコミュニケーションを行おうとする一方で，女性は親密性や協調性といった考え方を重視し，精神的なつながりを得るためにコミュニケーションを行おうとする。このような，コミュニケーション機能への認識の違いが，男女間での誤解を生じさせるとしている。

また，行動上の違いがみられるのは，生物学的な性別の違いに限ったことではない。LoPresto, & Deluty（1987）は，高校男子生徒82名を対象に3か月間の観察研究により，ジェンダーとアサーション行動との関連を検討している。被験者はBem Sex Role Inventory（BSRI）により，男性性（masculinity），女性性（femininity），両性性（androgynous），分類不可（undifferentiated）の4タイプに分けられ，行動チェックリスト（Aggressive（AG）；30項目，Assertive（AS）；9項目，Nonassertive；8項目）による学生生活での行動について評定している。その結果，男性性（masculinity）の高い男子は女性性（femininity）の高い男子よりもAGが多く観察されている。

これに関連して，Deluty（1983）でも，サブミッシブ行動（SB）傾向が高い女子は，SBを女性性（Feminine）の高い行動と認識し，また，ASやSBの違いを大きく捉えていた。

以上のように，タブー視される行動や，求めている関係性のあり方，また，コミュニケーション機能に対する認識が，女性のアサーティブ行動を制限していると考えられる。

認知的側面

Ellis & Harper（1975）や，Beck（1976）の影響を受けたAlberti & Emmonsによるアサーション概念は，認知的な成長こそアサーティブ行動につながるものとして，これまでにも多くの認知的要因との関連が検討されている。

本研究では，アサーション行動の性差を説明するものとして，アサーションの構成要素と心理的要因，自尊感情と人気，さらに，アサーションの行動頻度や行動評価いった要因に関する検討を取り上げるものとする。

アサーションの構成要素と心理的要因との関連

青年期を対象にした柴橋（2001）の研究では，アサーションとは“自己表明”と“他者の表明を望む気持ち”の2側面で構成されるとし，それぞれの側面の下位因子と，性差についての検討を行っている（Table 2）。その結果，“自己表明”では女子が男子よりも「限界・喜びの表明」（項目例：友達に強く言いすぎて悪かったときは，その気持ちを伝える）を多く行い，男子は女子よりも「不満・欲求の表明」（項目例：友達の無神経な言い方で傷ついたときは自分の気持ちをはっきり言う）を多く行うことを明らかにしている。また，“他者の表明を望む気持ち”では，すべての因子（「相談・依頼を望む」，「率直な断りを望む」，「率直な抗議・注意を望む」，「独自な

Table 2　性差が確認された下位因子（柴橋，2001をもとに作成）

自己表明		他者の表明を望む気持ち	
限界・喜びの表明	男子＜女子	相談・依頼を望む気持ち	男子＜女子
不満・欲求の表明	男子＞女子	率直な断りを望む気持ち	男子＜女子
		率直な抗議・注意を望む気持ち	男子＜女子
		独自な意見の表明を望む気持ち	男子＜女子

意見を望む」）で女子が男子よりも他者の表明を望む気持ちが強いことが示されている。

このことから，男子では，友人との対立を招く事態に発展しようとも，自己の権利のために自己表明しようとする気持ちが強く，女子では，情緒的な交流を求める自己表明として，嬉しさや困ったことなどを友人に伝えたいという気持ちが強いことが明らかにされている。また，他者の表明を望む気持ちが男子よりも女子に強いことから，他者の考えや気持ちを確認しながら交流を深めようとする特徴が示唆されている。

さらに，この2側面に影響する心理的要因についての検討がなされている（柴橋，2004：Table 3）。

まず，アサーションの心理的要因として，「安心感」（項目例：友達は私の言葉にいつも耳を傾けてくれる），「配慮・熟慮」（項目例：自分の考えを言うときは友達を傷つけないように注意する），「率直さへの肯定感」（項目例：自分の気持ちや考えはとても大切なものだと思う），「スキル不安」（項目例：自分の考えを言おうとしてもどう言ったらいいのか分からなくて困ることが多い），「支配欲求」（項目例：友達が私のアドバイスにしたがわないのは許せない）の4因子がアサーションに深く関わる要因として確認されている。そして，すべての因子で性差が確認され，「支配欲求」を除き，女子の方が男子よりも得点が高いことが明らかにされた。

これにより，女子では，自分の率直な自己表明を認めてくれるという安心感や，自分の考えや気持ちが大切なもので，素直にそれを表明してもいいと思える肯定感が，友人とのコミュニケーションを促進するのだろう。ただし，自己表明する際には，友人の気持ちや状況をよく考えなければならないという配慮の必要性や，アサーションに対するスキル不安が随伴しており，慎重さと自信の無さがアサーション行動を抑制していると考えられる。

次に，“自己表明”と“他者の表明を望む気持ち”と心理的要因との関連を検討した結果，男子は女子よりも全般的に“他者の表明を望む気持ち”が低く，すべての下位因子に「配慮・熟慮」からの正の影響がみられた。これらを踏まえ，男子は相手のことや状況を考慮する気持ちの低さが示唆されている。女子では，「配慮・熟慮」から“自己表明”での「不満・要求の表明」への負の影響がみられた。これは友人に対して気を遣い，相手に合わせようとする傾向が自分の立場を守るための「不満・要求の表明」を抑制させていることを示唆している。

これらの研究から，男子は友人の気持ちや考えを慎重に考えるよりも，自分の考えや意見に従わせようとする気持ちが強く，女子は友人との情緒的な結び付きを求めるため，他者の表明を確認しながら自己表明を行っていることが分かる。

自尊感情・人気との関連

これまでにも，自尊感情は幅広い研究領域を通じて，様々な要因との関連が検討されてきた。ただし，一概に自尊感情がアサーティブ行動に影響するとは言えない現状がある。

それを証明する研究として，Deluty（1981）は小学生を対象に，3つのアサーション行動と自尊感情・人気との関連を検討している。その結果，自尊感情との関連が確認されたのは，男子のみであり，アサーティブ行動（AS）との正の相関と，アグレッシブ行動（AG）との負の相関が確認されている。一方女子では，いずれの行動とも自尊感情との関連は見られなかった。これについては，元々女子がアサーティブに振舞うことが難しい上に，幼少時代からアサーティブ行動によりもたらされる褒賞のなさから自尊感情がASに作用しない理由としてあげられているように（Jakubowski-Specter, 1973; Lao, Upchurch, Corwin, & Grossnickle, 1975），Deluty（1983）でも，女子のアサーティブ行動は，社会的強化につながらないと指摘している。

これらの結果より，ASが困難といって自尊感情が低いとは言えず，自尊感情が低くともASが可能ということもある。つまり，女子にとって，ASは自尊感情を高める誘因とはならないことが示唆されている。

また，他者評定による人気については，男子ではASとの正の相関とAGとの負の相関があり，女子ではAGとの負の相関が確認されている。従来より，男子による適度なAGは，クラス内での人気を高めるとされてきたものの（Lesser, 1959; Butcher, 1965），男女とも，AGは

Table 3　アサーションの心理的要因（柴橋，2004をもとに作成）

安心感	男子＜女子
配慮・熟慮	男子＜女子
率直さへの肯定感	男子＜女子
スキル不安	男子＜女子
支配欲求	男子＞女子

他者から人気が得られず，行動指標としての評定においても，不適切な行動であるとの認識がなされていた。

これらより，男子ではASがクラス内の人気につながることから，自尊感情がASの促進に作用する仕組みがあるが，女子では，ASと自尊感情との間に関係性が見られないことが明らかにされている。

行動頻度と行動評価との関連

心理的要因を重視する研究の一方で，アサーション行動に関する行動の頻度や，行動に対する評価測定に注目した研究がある。

Deluty（1979）は，アサーティブ行動（AS）とアグレッシブ行動（AG）が混同した従来の自己報告式尺度の問題点を指摘した上で，ASとAGを事前に区別し，仮想場面の提示から対処法略としての行動を選択させるChildren Action Tendency Scale (CATS)を開発している。これにより，アサーティブ行動（AS），アグレッシブ行動（AG），サブミッシブ行動（SB）の行動頻度の測定を可能にしている。

そして小学生を対象にした一連の研究では，行動頻度の性差が検討されている。その結果，男子は女子よりAGを多く選択し，女子は男子よりもAS，SBを多く選択していた（Deluty, 1983, 1985）。

さらに，行動の認知的評価として，AGについては，男子が女子よりも6つの観点で，高い評価を示していた（良い（good-bad），賢明（wise-foolish），成功（successful-unsuccessful），親切（kind-cruel），強い（strong-weak），勇敢（brave-cowardly））。また，ASについては，女子が男子よりも6つの観点で高い評価を示していた（良い，賢明，成功，強い，女性らしい（masculine-feminine），勇敢）。最後に，SBについては，女子が男子よりも3つの観点で高い評価を示していた（良い，強い，勇敢）。これにより，3つのアサーション行動に対する認知的評価として，男子ではAGを肯定的に捉え，女子ではAS，SBを肯定的に捉えていることが明らかにされた（Deluty, 1983）。

これらの研究からも，3つの行動に対する認知的評価が，行動頻度に影響することが示唆されており，肯定的な評価を示す行動は，実際に行動表出される可能性が高いと考えられる。しかし，高得点を示した被験者別に行った検討では，より複雑な実態が明らかにされている。

Deluty（1985）の研究では，仮想場面に対して（1）“あなたがこの場面に遭遇したら，何と言いますか？”という問いに対し，思いつく限り自由記述により回答を求めている。回答は複数の評定者によりAS，AG，SBに分けられた。次に，（2）CATSで提示されるすべての対処方略について，“成功（successful）－失敗（unsuccessful）”という指標による評定と，（3）“自分が実行するのに最も適した行動”と“他人が実行するのに最も適した行動”をそれぞれ1つ選ぶよう求めた。

その結果（Table 4），CATSでのAG得点が高かったAG男子は，（1）AGの回答が多く，（3）自分の行動としてAGを選択していた。一方，AG女子では，（1）AGの回答が多く，（2）AGに低い評価，（3）他人の行動としてAGを選択していた。AS得点が高かったAS男子は，（1）ASの回答が多く，（2）ASに高い評価，（3）自分の行動としてASを選択していた。一方，AS女子では，（1）ASの回答が多く，（2）AGに高い評価を示していた。SB得点が高かったSB男子では，（1）AGの回答が多く，（3）自分の行動としてAGを選択していた。一方，SB女子では，（1）AGの回答が多く，（2）AGに高い評価，（3）他人の行動としてASを選択していた。

このように，AS男子とAG男子は，それぞれ自分が実行するにも適した行動と捉えているが，SB男子ではAGに対する高い評価が認められた。一方，女子では，CATSにて高得点を示した行動と，自分が実行するのに適した行動，さらに，高い評価を示す行動とも一致していない。これらのことより，SB男子と女子では，実際に高い頻度で選択している自らの行動に対し，必ずしも満足して実行しているわけではないことが伺われる。

Table 4　対象者別の行動評定（Deluty, 1985をもとに作成）

CATS		（1）回答	（2）Success評価	（3）誰が実行する
AG	男子	AG		AG　自分
	女子	AG	AG　低	AG　他者
AS	男子	AS	AS　高	AS　自分
	女子	AS	AG　高	
SB	男子	AG		AG　自分
	女子	AG	AG　高	AS　他者

社会的文脈

行動療法での考えから，すべての行動は，個人が直面する状況や場面の要因を踏まえて表出されるものである（Wolpe & Lazarus, 1966）ように，アサーション行動においても，場面要因や対話者との関係性による影響は大きい。

塩見・庄田（2004）では，児童を対象に割り込み場面（列に並んでいるところを割り込まれた状況）と係り決め場面（同じ係りになろうと誘われたが，違う係りをしたいという状況）という場面提示から，“あなたが一番するだろうと思う行動”を12項目から選択させ，主張的行動群（主張群），攻撃的行動群（攻撃群），服従的行動群（服従群）に分類された（係り決め場面では攻撃群と服従群の2群）。さらに，児童用主張性尺度（濱口，1994）の因子分析により，得られた下位因子「自分を守る行動」（項目例：あなたはおもちゃをかしてほしいと言われても，貸したくないときは，ことわれる）と「他者と関わる行動」（項目例：あなたは，どうしていいか分からないことは，はずかしがらないで，友だちにそうだんする）の得点が，群による違いが見られるのか検討している。その結果，両場面において群ごとの違いが確認された。ただし，割り込み場面では，主張群，服従群では男女比はほぼ等しいが，攻撃群のみ男子の数が際立って多かった。また，「自分を守る行動」では男子が女子よりも得点が高く，「他者と関わる行動」では女子が男子よりも得点が高かった。

これは，男子の支配的な対人関係を求めるため，攻撃的な行動を取りやすく，女子は親和的な対人関係を求めるため，非主張的な行動を取りやすい（Maccoby, 1990；濱口，1992）ことからも，「自分を守る行動」として男子は主張的・攻撃的であり，「他者と関わる行動」として女子は服従的な行動を取りやすいことが示唆された。

さらに，対話者の性別によって，その行動に対する印象形成が異なったり（Hull & Schroeder, 1979），自らが示す行動にも影響が及ぶだろう。

Eisler, Hersen & Miller（1975）では，ポジティブ場面（賞賛や好意などのポジティブな感情が生起しやすい場面）とネガティブ場面（怒りや不満などのネガティブな感情が生起しやすい場面）で構成される32場面をビデオテープで録画し，評価者による行動評定を行った。その結果，対話者となるサクラが女性よりも男性の方が，被験者は長く発言をする傾向が確認された。また，ポジティブ場面において，賞賛や高評価を伝えるのは，サクラが女性である場合に多く，好意を伝えるのは，サクラが男性である場合に多かった。ネガティブ場面において，反論や抗議をするのは，サクラが女性である場合が多く，相手の意向に沿った従順な行動を見せるのは，サクラが男性である場合に多かった。このように，同じ場面であっても，対話者の性別により，発言内容や行動に配慮する姿勢が示唆されている。

さらに，アサーティブ行動について，高アサーティブ群と，低アサーティブ群との比較では，高アサーティブ群は対話者の性別に関わりなく賞賛を伝えていたが，低アサーティブ群では，対話者が男性より女性に多くの賞賛を行っていた。したがって，十分にアサーティブ行動が取れる人は，対話者の性別によって行動表出を抑制したり，相手に合わせて行動を変容させることが少ない可能性が示唆された。

最後に

本論文では，性別に焦点を絞りアサーション行動に関する研究知見を概観，整理し，アサーション行動との関連が確認された要因について論じてきた。最後に，今後の実践活動で必要とされる3つの視点を示すものとする。

第1に，女性が自分らしくアサーティブ行動（AS）するのは限界がある（Jakubowski-Spector, 1973）ように，従来から男性だけでなく女性自身でも，ASは女性らしくない行動と捉えられてきた。しかし，これまで考えられてきたASとは，主張的で攻撃的な印象の強いものであったように思われるが，最近ではアサーションを「自分も相手も大切にした自己表現」（用松・坂中，2004）と定義されるように，自他尊重の考えに基づいたものがASだとされている。したがって，自分の意見や気持ちを主張するだけでなく，自分にも相手にも十分に配慮することで，女性らしい行動としてのASは可能であろう。現状としては，女性が用いやすい効果的なASは確固たる位置づけはなされていない。しかし，今後自分の意見を適切に主張するための実践活動や，実証研究などで，女性らしいASの模索が進められていくことが期待される。

第2に，平木（1993）により開発されたアサーショントレーニング（理論編と実習編での構成）でもあるように，ロールプレイ課題を用いた実践活動が増えつつある。こうしたロールプレイによって行動リハーサルを図ることは，トレーニング後の行動般化や行動の定着につながると考えられ，効果的な取り組みであろう。しかし，こうした実践活動が増える一方で，学問領域としての研究知見の成果に遅れが見られる。というのも，これまではどのような状況においても，いかにASができるのかが重視されてきた。しかし，反応がより適切であるかを判断するには，その反応がどれほどASかというより

も，その状況に適切かどうかによる（Rich & Schroeder, 1976）とあるように，場面の特性や対話者との関係性を考慮した上で，適切なアサーション行動を判断する必要があるだろう。さらに，実践と研究で個別的に知見の集積が進行しているが，両者がより密接な関係を築いた上で，研究知見に基づいたトレーニングプログラムの開発や，実践活動における効果測定などの取り組みにより，さらにアサーショントレーニングの効果を保障し，洗練されたプログラムの発展に貢献すると考えられる。

第3に，Deluty（1985）の研究では，AG男女では，対処方略としてAGの回答が多く，自己／他者が実行するのに適した行動としてもAGを選択していた。また，SB男子・AS女子・SB女子では，AGを高く評価しているように，男女ともASに対する認識の低さが伺われる。これについて，現代の大学生でも，アサーションにはAGとSBの2通りしかないと考えているようであると指摘されている（堀川・柴山，2003）。以上のことより，AG，SBに偏った選好を防ぐためAG，SBに対する誤った認知を修正し，3つの行動がバランスよく選好されるよう，ASに対する知識と，行動レパートリーを増やすなどの介入プログラムの開発が望まれる。

引用文献

Alberti, E., & Emmons, M. (1970). *Your Perfect Right: A Guide to Assertive Behavior*. San Luis Obispo, California: Inpact Publishers.

Beck, A.T. (1976). *Cognitive therapy and the emotional disorders*. New York: International Universities Press.

Butcher, J. (1970). Manifest aggression: MMPI correlates in normal boys. *Journal of Counsulting Psychology*, 29, 446-454.

Caldwell, M.A., & Peplau, L A. (1982). Sex defferences in same-sex friendship. *Sex Roles*, 8, 721-732.

Deluty, R.H. (1981). Adaptiveness of Aggressive, Assertive, and Submissive behavior for Children. *Journal of Clinical Child Psychology*, 10, 155-158.

Deluty, R.H. (1985). Cognitive mediation of aggressive, assertive, and submissive behavior in children. *International Journal of Behavioral Development*, 8, 355-369.

Deluty, R.H. (1979). Children Action Tendency Scale: A Self-report measure of Aggressiveness, Assertiveness, and Submissiveness in Children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47, 1061-1071.

Deluty, R.H. (1983). Children's Evaluations of Aggressive, Assertive, and Submissive Responses. *Journal of Clinical Child Psychology*, 12, 124-129.

Eisler R.M., Hersen, M., & Miller, P.M. (1975). Situational Determinants of Assertive Behaviors. *Journal of Counsulting and Clinical Psychology*, 43, 330-340.

Ellis, A., & Harper, R.A. (1975). *A new guide to rational living*. North Hollywood, CA: Wilshire Book Co.

濱口佳和（1992）．挑戦場面における児童の社会的認知と応答的行動に関する研究―仲間集団内での人気ならびに正の効果―　教育心理学研究，40，420-427.

濱口佳和（1994）．児童用主張性尺度の構成　教育心理学研究，42，463-470.

平木典子（1993）．アサーション・トレーニング　―さわやかな〈自己主張〉のために―　日本・精神技術研究所.

堀川徳子・柴山謙二（2006）．現代の大学生に対するアサーション・トレーニングの効果について　熊本大学教育学部紀要（人文科学），55，73-83.

Hull D.B., & Schroeder, H.E. (1979). Some Interpersonal Effects of Assertion, Nonassertion, and Aggression. *Behavior Therapy*, 10, 20-28.

Jakubowski-Spector, P. (1973). Facilitating the growth of women through assertive training. *The Counseling Psychologist*, 4, 75-86.

Kirchner, E.P., Kennedy, R.E., & Draguns, J.G. (1979). Assertion and aggression in adult offenders. *Behavior Therapy*, 10, 452-471.

小林由美子（2003）．不登校女子中学生に対する適応指導教室でのかかわり　アサーションモデルを提示して　心理臨床学研究，21，235-245.

Kramarae, C. (1981). *Women and men speaking*. Rowley, MA: Newbury House.

Lao, R.C., Upchurch, W.H., Corwin, B.J., & Grossnickle, W.F. (1975). Biased attitudes towards females as indicated by ratings of intelligence and likeability. *Psychological Reports*, 37, 1315-1320.

Lesser, G. (1959). The relationships between various forms of aggression and popularity among lower-class children. *Journal of Educational Psychology*, 50, 20-25.

LoPresto, C.T. & Deluty, R.H. (1987). Consistency of Aggressive, Assertive, and Submissive Behavior in Male Adolescents. *The Journal of Social Psychology*. 128, 619-632.

Maccoby, E.E. (1990). Gender and relationships: a de-

velopment account. *American Psychologist*. 45, 513-520.

Malts, D.N., & Borker, R.A. (1982). A cultural approach to male-female miscommunication. In John J.G. (Ed.) *Language and social identity* (pp.195-216). Cambridge, MA: Cambridge University Press.

用松敏子・坂中正義（2004）．日本におけるアサーション研究に関する展望　福岡教育大学紀要，53，219-226.

中釜洋子（2000）．カウンセリングに学ぶ友だちづくり役立つ知識と技法　アサーション・グループワーク　自分も相手も大切にするやりとり　児童心理，54，82-88.

内藤武（1987）．アサーション（自己表現）トレーニングについて　学生相談研究，19，64-67.

Phelps, S., & Austin, N. (1975). *The Assertive Woman*. Atascadero, CA, US: Impact Publishers Inc.

Rich, A.R., & Schroeder, H.E. (1976). Research issues in assertiveness training. *Psychological Bulletin*, 83, 1081-1096.

柴橋祐子（2001）．青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち　発達心理学研究，12，123-134.

柴橋祐子（2004）．青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因　教育心理学研究，52，12-23.

清水隆司・森田汐生・竹沢昌子・久保田進也・三島徳雄・永田頌史（2003）．日本語版 Rathus Assertiveness Schedule（RAS）の作成と信頼性・妥当性の検討　産業医科大学雑誌，25，35-42.

塩見邦雄・庄田明子（2004）．児童のアサーションと学校ストレスの関係についての研究　―新しい「児童版アサーション測定尺度」を用いて―　兵庫教育大学研究紀要，24，59-73.

園田雅代（2003）．学生の〈語り〉から見るアサーションとジェンダーの関連　創価大学教育学部論集．54，53-68.

Spender D. (1980) *Man made language*. London, Bostone, and Henlet: Routledge and Kegan Paul.

Tannen, D. (1990). *You just don't understand: Women and men in conversation*. New York: Ballantine.

Townend, A. (2007). *Assertiveness and diversity*. New York, NY: Palagave Macmillan.

Wilson, K., & Gallois, C. (1993). *Assertion and its social context*. New York: Pergamon Press.

Wolpe, J. & Lazarus, A.A. (1966). *Behavior Therapy Techniques: A Guide to the Treatment of Neuroses*. Pergamon Press.

（2009年11月15日受稿）

ABSTRACT

An Overview of Researches on Assertiveness

Yumi ANDO

An evaluative review of research into assertiveness is presented to highlight gender and sex. This article dealing with assertiveness was overviewed from five perspectives; (1) definition of assertiveness, (2) linguistics, (3) cognition, (4) tendency of assertion behavior, (5) social context.

For the first, I reviewed definitions of assertiveness that had been addressed to form of behavior. Then, I indicated that some limitation for many women is not being able to be as assertive as they would like and that relationship between assertion and several elements.

These reviews has founded to the difference of sex. Therefore I suggested that development and use of assertion training would depend upon sex.

Key words: assertion, linguistics, cognition, behavior, social context